

# わたし なか 私の中に

## ■ 楽曲データ

歌詞：山崎澗朗 作詞

楽曲：大栗裕 作曲

発表：学校連合会 1969年

初演：「龍谷混声合唱団第24回定期演奏会」 1969年12月4日

初出：—

管理番号：M1651

## ■ 創作の経緯

学校連合会（現・龍谷総合学園）で制作した作品で、原曲は女声二部合唱。作詞者は詞について、京都女子大学教授・上村けい（1899～1985）から、「念仏というものを、南無阿弥陀仏というお名号を使わずに、分かりやすく詩にできないだろうか」と言われ、「〈仏を念う〉ということは、〈私の中に仏が在る〉と領下して書いた」と語っている（『めぐみ』第181号）。

初演は、増山顕珠（元京都女子大学・龍谷大学学長、1969年没）の追悼として、《み仏のほほえみに》《いのちはほろびない》とともに行われた。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『私の中に』 手書き印刷譜

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

## ■ 解説

### ◆ 詞について

朝・昼・夜の情景のなかで、阿弥陀さま（南無阿弥陀仏）のおはたらきが確かに私のなかに届いてくださっていることを表現しています。

### ◆ 作詞者について

作詞の山崎澗朗（1941～）は兵庫県生まれ、龍谷大学を卒業後、京都女子高校教諭・京都女子大学講師を経て、現在は兵庫教区出石組正福寺住職を務めています。龍谷大学在学中、同大学男声合唱団に所属したことが縁となって、仏教讃歌の作詞を手がけるようになりました。主な作品に、男声合唱組曲《観音》（多田武彦作曲）、《いつか私は》（大谷千正作曲）、龍谷総合学園オリジナルソング《空へ海へ》（三浦明利作曲）などがあります。

## ◆作曲者について

作曲は、大栗裕（1918～1982）。大阪の船場（大阪町人文化の中心地）に生まれ、オーケストラのホルン奏者として活躍しましたが、独学だった作曲の分野でオペラ《赤い陣羽織》や管弦楽曲《大阪俗謡による幻想曲》（ともに1955年作曲）が高く評価され、作曲活動に専念するようになりました。作品のもつ強い民族性から「東洋のバルトーク」と呼ばれ、管弦楽やオペラのほか、吹奏楽・合唱・邦楽と幅広いジャンルを手掛けたほか、マンドリン・オーケストラの顧問を務めていたことから、マンドリン・オーケストラ用の楽曲も多く遺しています。

1964（昭和39）年に京都女子大学教授へ就任したことから仏教音楽の創作も行うようになり、本作品のほかに交声曲《歎異抄》などを発表しました。

## ◆歌い方について

①歌詞から考えると、旋律は6小節＋4小節＋5小節という構成です。冒頭6小節をひと息で歌うことが難しい場合は、気持ちはつないだまま、途中で息継ぎをしましょう。

②6小節目1拍目「シb」は、直前の音から幅があり、ピッチが低くなりがちなので、気をつけましょう。また、長さを3拍保つこと、次の入り（8分音符）をテンポよく入ることに気を配りましょう。

③11小節目から14小節目までは、音量がメゾフォルテ（やや強く）やフォルテ（強く）と指示されています。音量は大きくても、言葉を大切に、丁寧に歌いましょう。

④17小節目は、1・3番と2番とで歌詞の付け方が異なりますので、注意しましょう。

## ◆楽譜・音源

二部合唱版の楽譜は、『讃歌集 二部合唱』第2巻に掲載されています。

音源は、CD『仏教讃歌混声合唱集 いのち』に収録されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 54（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第181号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.